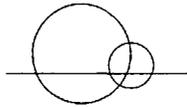


〈講演会〉



1880年代～1920年代の「亜細亜主義」の形成：小寺謙吉を中心に

上智大学国際教養学部准教授 サーラ・スヴェン

【司会】 皆さんお待たせいたしました。本日は愛知大学東亜同文書院大学記念センターの講演会にわざわざお集まりいただきまして、心よりお礼を申し上げます。本来ならば記念センターの所長であります藤田先生がご挨拶すべきでございますが、藤田先生は本日どうしても欠席できない大学院関係の会がございましたので、よろしくとのことございまして、私が代わりに司会など務めさせていただきます。申し遅れましたが、東亜同文書院大学記念センターで客員の研究員をしております大島隆雄と申します。

この東亜同文書院大学記念センターは2年前に記念センターが所蔵する史資料の展示公開と、東亜同文書院に関する総合的研究というプロジェクトを立ち上げ、文科省の補助金をいただきましてこの2年半ほど活動を続けてまいりました。活動は多様にわたるわけではありますが、今年やったことを申しますと、持っております史資料、特に山田良政・山田純三郎関係の史資料を展示公開いたしました。7月には良政の故郷でございます青森県の弘前市で行ないまして、この11月には23日から25日まで、つい最近のことでございますが九州の福岡でそれをやりました。またシンポジウムも昨年は中国人の学者を招いてやったわけですが、今年は11月2日に「東亜同文会の東アジアにおける教育活動」ということで国内シンポジウムを開催いたしました。それから講演会もいろいろ行なっておりますが、最近では東京にあった東

京同文書院についての講演会を行ないました。

今までは東亜同文会や東亜同文書院、あるいは愛知大学草創期に直接関係された人をお招きして講演会を開いてきたわけでございますが、本日は少しやり方を変えまして、東亜同文書院から愛知大学へという展開の歴史的背景、あるいは思想史的背景になったお話をさせていただくということで、上智大学のサーラ・スヴェン先生をお招きしてお話を聞くことになったわけです。これはまた我々にとって非常に参考になる話だと喜んでおります。

それに先立ちまして簡単にサーラ・スヴェン先生の略歴と主要業績についてご紹介いたします。お配りいたしましたプリントは先生のホームページに基づいて私が勝手に作ったものであります。先生の専門分野は近現代日本政治史、外交史と歴史記憶となっております。歴史記憶という言い方は日本ではちょっと馴染みが無いんですが、我々流に言いますと歴史認識とかあるいは教科書問題といったことでだいたいお分かりいただけると思います。ドイツは日本と同じように第二次世界大戦に敗れて、そのあと周辺諸国との間の歴史認識の難しい問題を日本に比べますと首尾よく解決されてきたわけですが、そういう背景をお持ちであって同時に日本のことを研究されておられますので、日韓の問題とか日中の問題についてもご研究になり、ご発表になっておられるわけです。

学歴のほうですが、一言で申しますとドイツの

いろいろの大学で学ばれ、日本流に言いますとあっちこっち大学を渡り歩いたみたいに見えますが、そうではなくて、ドイツではセメスターが違えば他の大学に移れるわけです。そういう非常に良い面を持っていて、マインツ、ケルン、ボン大学で学ばれました。基本的にはドイツではボン大学で博士号を取得されているわけですが、その間に日本にも留学され、とくに金沢大学や金沢大学の大学院で勉強されました。同時に学歴の後半は日本での職歴とも重なっておりまして、金沢大学などの先生をされたわけがあります。

それからちょっとこれは分かり難いことだと思いますが、ドイツ-日本研究所の役員になられ、またその人文科学研究部長を務められました。ドイツ-日本研究所というのはご存じの方がおられると思いますが、ドイツにある日本に関する研究所ではなく、日本の東京にあります。1988年から始まっておりまして、ちょうど20年ぐらい経っているわけですが、そこにドイツの優れた日本研究者が集まって研究をされている。これは政府から全部資金が出ておりまして、しかし研究は自由に行なわれるという、非常に面白いと言いますか、優れたと言いますか、研究所でございます。現在知り得る限りでは4つの部門がございまして、1つは人文科学、もう1つは社会科学、もう1つは経営経済、もう1つは日独関係という4つの部門に、それぞれドイツ人が1人2人張りついて研究を盛んにやっておられるわけです。日本人も協力しているようですが、そこでじっくり研究なされたわけです。そしてそのあと東大の大学院総合文化研究科・教養学部で3年間准教授を務められまして、この秋に上智大学の国際教養学部に移られました。

こういう経歴から見ますとドイツの中でも最も優れた日本研究者であられる。しかも若手で今後どこまで伸びるか分からないぐらいの才能をお持ちのように私には思えます。この間いろいろな著書・論文を発表されておりますが、一応日本語の

訳が出ておりますのでお分かりいただけると思います。私は配布資料中「業績一覧」の5番の単著、「大正デモクラシーと陸軍：シベリア出兵期における民主主義と軍国主義」、これが専門的なご研究の出発点であると思います。それから1頁目の4、3、2、1番と研究を続けられてきたわけですが、その中には先ほど申しました歴史認識の問題についての著作もあり、最近では『パンアジアニズム・イン・モダン・ジャパニーズ・ヒストリー』という本を共編なさったわけがあります。私が先生の業績に注目したのはそういう英語の論文をちょっと読んだためであり、そこで先生に講演をお願いすることになったわけですが、本日の講演の基礎になったのは、2頁目の一番最後に書いてあります「The Construction of Regionalism in Modern Japan: Koderu Kenkichi and his "Treatise on Greater Asianism"」という論文でありました。

そういうことで私達は東亜同文書院の歴史を研究してきたわけですが、今日はそれを取り巻く歴史的背景、特に思想史的と言いますか、思想とまで体系化されていないということですので、思潮と言いますか思想の流れと言いますかそういうことに関して、あまり今まで日本人が知らなかった小寺謙吉という人を取り上げてお話ししたいと思います。表題はこれも私が勝手に付けたものですが、内容的には同じこととございますが厳密には、今日のレジュメにありますように「1880年代～1920年代の亜細亜主義の形成：小寺謙吉を中心に」というご表題のもとにお話を願えるかと思えます。先生はものすごく日本語が上手で、私の日本語よりもお上手でありますから、通訳などの二重手間を省きますために日本語でご講演をお願いしたいと思います。ではサーラ先生、よろしく申し上げます。

【サーラ】 こんにちは。サーラです。今大島先生にご紹介いただき、その中でかなり褒めすぎてる

ところもあると思いますが、よろしくお願ひします。東亜同文書院大学記念センターにお招きいただき本当にありがとうございます。光榮に思いません。

東亜同文書院とその母体であった東亜同文会とは、日本のアジア主義の歴史の中で最も影響力のある、最も連続性を見せる団体でありました。その活動は言うまでもなくアジア主義的ではありませんでしたが、私達は今アジア主義的というレッテルを貼る一方で、東亜同文会そして他のいわゆるアジア主義的団体の活動においても、「アジア主義」という言葉自体は意外に遅い時期になってから利用するようになりました。東亜同文会の設立者として有名な近衛篤磨の時代において、アジア主義という言葉は一切利用されていなかったのです。一般的にアジア主義という言葉が利用されるようになったのは第一次世界大戦の時期で、その最も代表的な使用例としては小寺謙吉の『大亜細亜主義論』という本があります。今日の講演ではこの著書がアジア主義思想という運動の発展において、どのような位置を占めているのかという問題についてお話ししたいと思います。アジア主義という言葉が使われたか使われなかったかというのは些細な問題に思えるかも知れませんが、やはり第一次世界大戦の時期にその言葉が創造されたのにはわけがあり、その創造は思想面において大きな変化を表しているのです、この変化は決して無視できないと思います。

まずアジア主義の典型的な定義から始めたいと思います。今日配られてるレジメにも出ていますが、竹内好という有名な中国文学者が1963年にアジア主義をこのように定義しています。「私の考えるアジア主義は、ある実質的内容をそなえた、客観的に限定できる思想ではなく、一つの傾向性ともいふべきものである。右翼なら右翼、左翼なら左翼のなかに、アジア主義的なものと非アジア主義的なものを類別できる、というだけである」。確かに近現代史におけるアジア主義を考えると、

さまざまな形を取り、他のさまざまな思想と連鎖して議論されてきましたが、それにしても果たして1つの傾向性に過ぎなかったのかということについて今日は少し考えていきたいと思います。

今日のタイトルは「アジア主義の1880年代から1920年代までの形成」ということなので、まず1880年代の初期アジア主義とその団体を考えてみたいと思います。アジア主義の初期の諸団体の趣意書とか設立宣言などを見てみると、確かに竹内が言うようにアジア主義は漠然としたもので、1つの傾向性だけであるというような印象を受けます。たとえばアジア連帯を唱えた最初の結社の1つである興亜会という団体は1880年に結成されていて、その会の名前でも明らかなように、この時期においてアジア主義という概念はまだ用いられず、他の表現によってアジア連帯論が唱えられています。すなわち興亜会の興亜だとか、同じ興亜会の前身である振亜会というものもありました。そして有名なスローガンとして「同文同種」とか「唇齒輔車」といったキャッチフレーズで1880年代にアジア主義的な思想、感情が主張されました。この明治初期のアジア連帯論というのは、当時の国際関係における日本・中国・韓国それぞれの立場をも反映して、まだ割と比較的平等主義的な性格を持ったものでありました。その内容は確かに竹内が言うように漠然としていてあまり具体性が無く、むしろ相互に言語の習得を奨励したり、それぞれの国の事情を研究したり、そのようなことを目的としていたのです。

1898年政治結社の東亜会と同文会が合併して東亜同文会が設立され、1900年に興亜会（その時点では亜細亜協会と改名されていましたが）も合併されました。この東亜同文会の設立趣旨に、興亜会よりも少し具体的な目的が取り上げられています。その中で東アジアの地域内交流の長い歴史を強調しながら、地域協力の基礎をなすものとして、その文化的・風土的・宗教的な共通性が強調されました。ただし会の目的としては「1. 支那



を保全す、2. 支那および朝鮮の改善を助成す」とあるように、やはり日清戦争後の東アジアで日本が指導的な役割を果たしてきたことも明らかであります。この時期から中国と朝鮮に対する強烈な指導意識と優越感が窺えるように思います。

この優越感がさらに強くなってきたのが言うまでもなく日露戦争の時であります。日露戦争はアジア主義とアジア連帯論にとっては大きな転換期でありました。日露戦争後日本のアジア諸国に対する指導意識がいつそう強くなっただけではなく、国際的にも大きな問題になりつつあった人種問題の影響もあって、日本を中心とする「有色人種」の結集と、ヨーロッパ「白人」列強との衝突が、現実性のあるシナリオとして描かれ始めました。「白人」列強の超大国であるロシアを破った日本は、いわゆる括弧付きの「名誉白人」として認められるようなところもありましたが、その一方でさまざまな場面において日本と日本人に対する差別が絶えることはありませんでした。このことからいずれ日本は白人と対決しなければならないというような主張をする声が、1905年以降日本で徐々に力を増していったのであります。

しかし日露戦争当時を考えてみると、日本政府の公式見解はまだ全然違うものでありました。日本政府は日露戦争の時、ヨーロッパにおけるいわゆる「黄禍論」の浮上を防ぐために、数人の外交官をヨーロッパに派遣して、アジア主義的な同盟、アジア主義自体の不可能性を宣言させたわけであります。そこで有名なのはヨーロッパ、主にイギリスに派遣された末松謙澄という外交官であります。末松はロンドンを基礎にしたヨーロッパでアジア主義的な連盟、東亜連盟のようなものがあり得ないということを、いくつかの講演で主張しています。これはもちろん日本政府の公式なプロパガンダでもあり、ここで日本政府の公式見解が浮上ってきます。今日の配付資料に末松謙澄の演説の一節が載っています。彼が英語で講演したものを引用して載せました。「Of late, there

has been much talk about the Yellow Peril, or the possibility of a Pan-Asiatic combination; this appears to me...nothing more than a senseless and mischievous agitation. ...」。こういう汎アジア的な連盟というのは無意味で悪意のある煽動であると末松謙澄は言っています。「Can anyone image that Japan would like to organize a Pan-Asiatic agitation of her own seeking, in which she must take so many different peoples of Asia into her confidence and company--*people with whom she has no joint interests or any community of thought and feeling?*」。アジア主義連盟を立ち上げるならば、日本はアジアのいろんな民族と一緒にしなければいけない。しかしその諸民族と全く利害は共通してないし、全く思想と感情における共有性が無いと末松謙澄は言っていて、アジア主義的な連盟の可能性を完全に否定しています。

一方日本国内でむしろ野党に属する人達には、当時人種論的な主張に基づきアジアの結集の必要性を強調するような声もたくさんありました。その一例はこの東亜同文会の設立者としても有名な近衛篤磨であります。近衛篤磨は1898年に有名な雑誌『太陽』で、「黄色人種同盟論」という論文を発表しました。そして日露戦争の最中において有名な森鷗外はドイツ留学を経て日本に帰国し、『黄禍論梗概』という本を著して、その中でこのように述べています。「一般の白人は我が国人と他の黄色人を一纏めにして、これに対して一種の厭悪もしくは猜疑の念をなしておるのでありますから、吾人は嫌でも白人と反対に立つ運命を持っておることを自覚せねばなりません」と、森鷗外は1904年に書いています。

さらに1908年には、雑誌『太陽』が「黄白人の衝突」という特集を組み、欧米列強とアジアとの間に近い将来人種的衝突が起こることは避けられないと警告を発しています。その中にこのようなことが書いてあります。「露国に対する日本

の勝利は地方的若しくはアジア的意識よりも大なる意義を有する一の出来事なり。東西の文明は、その原質を異にし、その発達を異にして、各々特有の色彩を有するが故に、人為を以てこれを調和せしむることは到底不可能のことなり。もし欧州諸国民にして白人中心の自負を以て東洋に臨み、アジアの文明に代わるに欧州の文明を以てせんとせば、その衝突はついに免るべからず。これは著者が無記名になっています。

このように日露戦争後の日本においていわゆる人種衝突論が広がり、その結果日本は白人と対立するアジアの盟主たるべきと主張する声が多くなり、日本人は「有色人種」の側に立つしかないという認識がいつそう強くなってきました。第一次世界大戦になるとこの意識は日本でさらに広がりを見せ、野党的な政治家・評論家のみならず、有力な政治家の間でも浸透していきました。その一例はたとえば山県有朋であります。山県有朋は1914年にこのような1つの覚書を書いています。少し省略しますが、「人種の競争は年一年より激烈を加えるの状あり。欧州の今回の大乱が終息に帰した後に於て各国が再び東洋の利権に注目する。白人と有色人との競争が急激となり、白人はみな相合して我が有色人の敵となるの時たるやも知るべからざるなり」。ここでは山県有朋が明白に日本人は「有色人種」であるという自己認識を露出しています。

さらにもう1つの例を挙げると、板垣退助も同じ時期に日本とアジア諸国の共通性、特に中国との親近性を強調して1914年にこのように書いています。「日支両国は遂に欧米列強の圧迫に対してその利害・境遇を一にするのみならず、固より同種同文の国にして共に家族性なる点において社会組織の根底を同じくし、共に菜食人種たるの点において生活の基礎を同じくし、したがって風俗習慣の相異ならざるものありて、国民相互に理解し得る点において極めて好適なる仕儀にあり」。中国人と日本人はみんな菜食と言ってるのはなぜ

かよく分かりませんが、ここで重要なのは風俗習慣が非常に中国と日本は似ているので、これは自然的に接近しなければならず、欧米と戦わなければいけないという認識を板垣は見せています。

このように山県とか板垣が証明していた人種・風俗・文化に基づくアジア諸民族との親近感、第一次世界大戦の最中からさらに体系的な地域意識、アジア意識の生成につながり、その時期に体系的・具体的アジア主義が形成されてくると思われます。この動きが第一次世界大戦の直中に起きたのは決して偶然ではありません。その時に欧米列強の新たな人種主義が表面化したこと、すなわち大戦中の米国やカナダにおける排日移民法の制定が日本のアジア主義に好機をもたらしたことはよく知られています。しかしそれだけではなく、第一次世界大戦当時日本がもはや弱小国ではなく単なる独立国以上の存在として東アジア地域における地域大国（regional power）として国際的に認知されるに至ったことも、日本の自己認識にとってますます重要な要素になってきました。アジア主義の形成はまさに日本の大国意識の高まりを体現するものでもあったと言えるかと思えます。この大国意識の形成があつて初めて、アジア連帯論を現実性のあるシナリオとして提示することが可能になってきて、第一次世界大戦を境にしてアジア主義の具体的・体系的な構想が数多く発表されるようになりました。そしてこの時期にアジア主義という言葉も言説において恒常的に用いられるようになりました。

配付資料2頁の3番に、当時の出版物をリストアップしました。私が今までに把握しているところでは、第一次世界大戦より前にはアジア主義であれ大アジア主義であれ汎アジア主義であれ全アジア主義であれ、その言葉はほとんど使われたことが無かつたし、使われたとしてもどちらかと言えば否定的な意味で使われました。たとえば1913年6月28日の東京朝日新聞の中でも



アジア主義という言葉が出てきます。その前々日の1913年6月26日には東京日日新聞が、内容は東京朝日新聞の記事とほとんど同じようなものですが、アジア主義について言及しています。その中で1913年にはご承知のようにアメリカやカナダにおいて排日移民法というものがあって、それに対する日本の反応を示す記事です。しかし当時の新聞を見てみると、さっき言ったように欧米の人種主義に対して多くのアジア主義者は、アジアを結集してヨーロッパといずれ戦わなければいけないということを主張しましたが、日本の政府そして日本の新聞はアジア主義を唱えるのではなく、むしろアジア主義という論調は馬鹿げたものであると否定しています。アジア主義を否定しながら東京日日新聞はこのように書いています。「日本人は日本人の必要と信じて世途と見るところを以て日本人のために単独に行動するのみ。以て日英同盟の挙行に貢献せんことを切望するものである」。日本の外交の中心に日英同盟がありまして、これを裏切ることなく、むしろイギリスとさらに仲良くしていこうということを、当時の日本の新聞、そして政府も唱えていて、アジア主義に対してはむしろ否定的な態度をとっています。

私が今までの資料で最初にアジア主義を公的に取り上げているのを見つけたのは宮崎滔天です。さすがにアジア主義の中でも有名な存在であります。1915年の宮崎滔天の「衆議院議員立候補宣言」の中で1段落目の最後のほうに「第一次世界大戦中に日本がアジア主義を確立しなければいけない」と書いています。国防の問題として、また対支問題を解決するため、大アジア主義の根底を確立しなければいけないと、宮崎滔天は肯定的に唱えています。

しかしこれはまだ珍しい使用例でありまして、小寺謙吉の本と少し状態が違っているのは、小寺が1916年に「大亜細亜主義論」という大きな本を出すと、これはすぐアジア主義的言説のブームを起しているわけです。配付資料のリスト

で分かるように1916年以降17年、18年と、さまざまな人達がアジア主義について雑誌や本に論文を書いています。通説では、たとえば『国史大辞典』を引用すると、「日本で最初にアジア主義を標榜した政治結社は黒龍会である」と書いています。だいたいの方はそういうふうには認識していると思いますが、実は黒龍会の出版物を見てみると、1917年以前にはやはりアジア主義という言葉は一切利用していません。もちろん黒龍会はアジア主義的な活動は行なっていますが、言葉としては使っていません。しかし面白いことに黒龍会も1917年にこのアジア主義言説ブームに便乗したわけでありまして。当時黒龍会が出した『亜細亜時論』という雑誌に「吾人同士大アジア主義の鼓吹に従事する者多年なり」と威張って書いています。

ところで黒龍会ぐらゐのアジア主義者を私達が今想像すると、多くの場合は九州出身で民権運動との関わりが強く、しかもさっき言ったように野党に属する人物であることが多いと思います。しかし小寺謙吉という人は、アジア主義を最初に体系的に論じた人物でありながら、九州を中心にするアジア主義者とはほぼ無関係でありました。小寺は神戸の裕福な一家に生まれ、10年近くドイツ・スイス・オーストリア・アメリカのさまざまな大学に留学して、市民法・国際法・国際関係を学んだ経験を持つ、いわゆる欧米通であります。1908年彼が留学から帰国すると、最年少で衆議院議員に選ばれて政界に進出しました。その後まず彼は国民党を経て1912年には立憲同志会に入りました。そして立憲同志会の後身の憲政会では総務を務め、帝国議会での外交問題における政府攻撃の先頭にも立っていました。1916年にこの小寺が「大亜細亜主義論」という本を刊行しました。今日わざわざ大島先生に持ってきていただいたんですけども、このような1,300頁を超える大著です。これは中国語にも翻訳（少し短くなりましたが）され、1918年に上海で刊行されました。この大

著の中で小寺は当時普及しつつあった「人種闘争構想」を中心に、日本によるアジアの結集すなわちアジア主義の樹立を提唱しました。彼はそれまでのアジア主義の、いささか漠然とした性格を超越し、アジア主義の基礎を徹底的に構築しようと思いました。

大亜細亜主義論の目指すものはその冒頭のいくつかの箇所では明らかになりますが、レジメに一部入っていますのでご覧ください。この本の中でそれまでのアジア主義的な言説を概括しつつ、とりわけ当時の欧米で流行していた人種概念に基づくいわゆる汎スラブ運動とか汎ゲルマン運動とか、そういうものを積極的に評価して、日本と中国を中心に、東アジアでもこのような「人種的同盟」すなわち「黄色人種」の連合が必要であると主張しています。小寺は外交政策のあり方としてアジア主義を構想すると同時に、その基礎としてアジア主義的なアイデンティティーというものも必要であると主張しています。アジア主義という思想には常に思想的な面と外交史的な面の両方がありますが、小寺の特徴の1つは外交と思想としてのアジア主義を1つにまとめたことです。彼はとりわけ日本と中国のさまざまな類似性によって、中国と日本の統合の可能性を唱えています。日本と中国の統合を将来的に可能にするために、彼はその方策として今後日本が鎖国根性を脱却し、両国民の雑婚が漸次増加すべきだということを主張しています。また小寺は日本と中国との関係は表面上領土保全の原則に従うべきであると宣言していますが、彼が言う領土とは、「支那本土」に限定されたものであると言っています。そこから中国のいわゆる「外藩部」（と彼は言っています）を除外せざるべからざるのみならず、満州・内蒙古は「自然の運命に属せり」と主張して、これら満州や内蒙古地方において日本の特殊權益が認められるべきだと唱えています。

先ほど言ったように当時小寺は憲政会に所属していましたので、同じ憲政会に所属していた加藤

高明外相が押し進めた対華21か条の要求を小寺も支持していました。日本と中国は本来提携すべきだと主張しつつ、彼が抱く中国に対する強い優越感が「大亜細亜主義論」の到るところに出てくるわけであります。当時の中国において小寺が強く批判されたことは言うまでもないかと思いますが、1つ有名な批判の例を取り上げると、1919年に李大釗は、日本のアジア主義を批判する「大アジア主義と新アジア主義」という論文の中で小寺の名前まで取り上げて、日本の大アジア主義の思想を、中国併合主義をごまかす言葉として痛烈に批判しています。この引用は配付資料の3頁に出ていますのでご覧ください。

日本のアジア主義は中国のみならず他の方面でも非常に批判的に受け止められ、アジア諸国のみならず欧米列強でも、第一次世界大戦のあと、この日本のアジア主義に対して強い警戒が生まれてきました。その背景には日本が自国の大国意識を欧米列強に対しても強く誇示するようになったことがあります。第一次世界大戦中から、もはやかつての末松謙澄の控えめな態度が放棄されて、日本のアジア主義の正当性を英語でさえ大胆に訴えるようになりました。さっき言ったように1910年代以前はアジア主義的な考え方は日本政府そして日本の高官から拒否され、アジア主義者というものはむしろ弾圧を受けた経緯がありますが、第一次世界大戦の国際関係における日本の地位の変化を受けて、アジア主義は第一次世界大戦中から海外に向けても積極的に宣言されるべきものであるというふうになりました。

こうした日本の英語によるアジア主義的な主張の中で最も頻繁に用いられたレトリックに、いわゆる「アジアモンロー主義」があります。これは1916年から徳富蘇峰や浮田和民らが、アメリカ合衆国がアメリカ大陸について主張したいいわゆる「モンロードクトリン」に倣って、日本は東アジアでのアジアモンロー主義を宣言すべきだと唱え始めました。ほぼ同時期に英語で「Asianism」

という言葉もまた日本人によって英語の出版物の中に表われてくるようになりました。実は英語やドイツ語では Asianism や Pan-Asianism という言葉がすでに 1900 年頃、すなわち日本語や中国語よりも早く、英語やドイツ語ではもちろん黄禍論的な文脈ですが、その中で Pan-Asianism という表現が欧米で利用されたこともあります。日本人によって初めて英語で Asianism という言葉が積極的に取り上げられたのは、おそらく 1914 年の、日本で刊行された英語の月刊誌『The Japan Magazine』における沢柳政太郎の「Asianism」という論文であります。これも配付資料の 3 頁に少し引用しました。

沢柳政太郎という人は教育官僚としては有名ですが、彼も第一次世界大戦の終わり頃、雑誌『太陽』や『新日本』を母体にして、アジア主義をテーマとする論文を繰り返し発表していました。そして 1919 年に『亜細亜主義』という題名の本を刊行しました。沢柳は同時にヨーロッパの汎ゲルマン運動、汎スラブ運動などに照らし合わせながら、近年の世界風潮に従って東アジアでも各民族を結集するアジア主義あるいは東ア主義を成立させる必要があると主張しています。しかし「アジア主義はアジアの諸民族が他の民族と同等の地歩を占めんとする主張」と言いながら、そこには日本の台湾、そして朝鮮半島の植民地支配の説得力ある説明はもとより、そもそもそれが存在していることについての指摘すらありません。彼の書いた論文の中でもやはりアジア連盟、アジア結集を唱えながら、アジアに対して強い優越感を表しているわけであります。

彼の英文を引用してみましよう。このようなことを書いています。「Japan is the most advanced of all the countries of Asia, and she is conscious of her responsibility toward the rest of Asia. When the Kaiser invented the "yellow peril" bogey (黄禍論の幻想) he unconsciously confessed western fear of Asia. This fear (恐怖)

is a nightmare at heart of western nations. If something is not done it may some day lead to a war between the East and the West, and the oriental people must be prepared for any such emergency. A federation of all the races of Asia will be the best way to do this; in other words, we must realize Asianism.」この最後の 3 行が最も重要であります、その中で沢柳は、「欧米は相変わらずアジアを恐れていますので、このままでは西洋と東洋の衝突は避けて通れない。戦争になるだろう」と警告しています。「そのための備えとしては、アジア諸民族の連盟が必要である」と彼は書き、それがゆえに日本が現実政治においてアジア主義を実践・実現しなければいけないというのが彼の説く論であります。さっき言ったようにこのような論調は日本国内では日露戦争以降ますます頻繁に世論の中に登場するのですが、海外に向けてしかも英語でこのような警告が発されたのはこの時代が初めてであったと思われれます。ここにはやはり日本の大国意識、そしてそれに基づく自信を見て取ることができるかと思います。

しかしこの日本の大国意識の誇示は、海外の日本に対する警戒をつのらせ、それがさらに日本のアジア主義の勃興をもたらすという悪循環が生じたという見方もあります。第一次世界大戦末期になると、欧米列強の間では新たに日禍論、つまり日本のみを対象とする黄禍論が浮上してきます。その中で代表例としては、無名のオランダ外交官と自称する人物が、1918 年と 1919 年に発表した『ザ・プロブレム・オブ・ジャパン』そして『ザ・アイシヨレイショナル・ジャパン』という 2 つの著作があります。この著作は当時の日本ではかなり知られていて、国会図書館の文書を見てみると、パリ講和会議で日本代表団のトップを務めた牧野伸顕という人もこの本を読んだし、沢柳政太郎もこの本を読みました。沢柳は 1918 年に「日本の国是政策」という論文でこの『プロブレム・オブ・ジャパン』という本をこのように批判しています。

「一外人の我が日本の地位と我が日本が遭遇しつつある時節とを説いて、あたかもわが憂国の識者が国民を拡散するために論ずるが如きものあるを知った。ただし著者は決して我が国に好誼を有するものではない。いや我に対して大いに敵意を有し、我が国に対して国際関係上孤立無援の地位に立たしめようとするものである。著者は日本を目して欧米諸国を敵として白人を迫害するもの、すなわち日禍論を力説して、しかもカイゼル（ドイツ皇帝）の黄禍説の如き根拠なきものにあらずして、現実的な日禍となすものである。もとより著者の撒くところは日本の力を過大視しておる。おそらくは日本を中傷するために日本の力を過大に書いてるのであろう」。

沢柳は日本が世界から孤立化することを懸念しつつも、同時に日本は欧米との衝突を避けるべきではないと、さまざまな論文で書いています。先の英文の引用もありましたが、1919年の論文にこのように書いています。「要するに日本はまず支那をその手に収めて、蒙古的・仏教的・一大国家（なぜかドイツ語で）『モンゴリーリッシュ・ブリディスティシャー・シュタート』を建設し、あるいは米国を敵として、あるいは英国を敵として、まず東洋におけるその植民地を略奪して自己の富強を致し、さらに欧州を扼せんとするのである」。さっき引用した「Asianism」という論文よりもはるかに踏み込んだ、大胆な構想であると思いますが、やっぱりヨーロッパで普及しつつあった汎○○運動を模範とし、同時代のドイツの思想（汎ゲルマン運動が非常に高揚していた）の影響も沢柳が受けているのは、この一節から間違いないと判断できるかと思えます。

そろそろまとめに入りたいと思いますが、竹内好が言うようにアジア主義は右翼でも左翼でも異なった形、異なった背景を持って存在していたのは確かであります。右翼的な黒龍会、そして左翼的な和親会の例で見られるように、アジア主義を信奉する立場からの発言は明治期以降右翼からも

左翼からも絶えず行なわれたわけでありまして、それは戦後に到るまで続いていると言えます。

しかしだからと言ってアジア主義は竹内が言うように客観的に限定できる思想ではなく、1つの傾向性に過ぎないとまで言うことは適当ではないと思います。アジア主義はさまざまな政治目的に利用されたり、空洞化してしまった時期もありましたが、最初からただの傾向性であったわけではないと思います。明治初期から大正期の間、特に外交に関する論争において、アジア主義は激しい議論の対象となり、感情的なものから少しずつ客観的で体系的な思想（イデオロギー）へと進化を遂げ、政治社会においてある程度定着していったと言えると思います。

第一次世界大戦期になると、アジア主義は大きな変質を経験します。これらの大アジア主義を定義した例に見られるように、その意義と目的を明らかにする試みがなされていて、それをきっかけにアジア主義は具体化・体系化していき、日本のアジア的なアイデンティティーの一環として定着し、思想的に重要な意味を持つようになりました。この変化が第一次世界大戦の時に起こったのにはさまざまな理由があります。1つは日本の欧化に対する抵抗ですが、当時内部では日本の欧化に対する抵抗が強くなってきて、欧化の行き過ぎたところを咎め、日本は自国の伝統に復帰しなければいけないという論調は明治後期から強くなってきました。言うまでもなく日本の伝統はアジア文化に基づいているものでありますので、この欧化への抵抗は間もなくいわゆるアジア回帰という形を取ったとも言えるかと思えます。

それと同時に日本の世界認識、そして外交においても、日本は欧米列強と距離を置くようになりました。欧米列強に認められつつある一方、日本は欧米人の人種主義に基づく差別を感じ続けていました。そのため欧米はいずれ敵になるというシナリオが生まれ、「人種」という概念を中心に、文明の衝突論が具体的になってきました。その文

明の衝突論・人種の衝突論において、日本は同じ「有色人種」の側に立つべきだという考え方が日露戦争以降広まってきて、アジア主義の形成につながっていくと思われまふ。また第一次世界大戦当時には、アジア主義的連帯論が初めて現実性のあるシナリオとして描かれるようになりました。これはさっき言いましたように日本の国力の増加と、それに伴い日本の国際関係における地位が変化したこと、すなわち日本の大国化の結果であると言えるかと思ひます。その現実性のあるシナリオとなったアジア主義は、日本国内においてそれまで在野的な性格であったが、それを脱却して政治の主流にも浸透し、国民の中にもある程度広がりを見せるようになりました。小寺のような政党政治家、そして沢柳のような教育官僚者によるアジア主義の声高な主張はこのプロセスの典型であると言えまふ。

アジア主義という言葉自体がこの頃に初めて継続的に使用されるようになったのも、アジア主義が具体化・体系化していった結果でありまふ。第一次世界大戦当時のアジア主義は、もはや無名の思想ではなくて、ただの1つの傾向性でもなくて、具体化・体系化された内容を持ち、政治家が現実の政治における選択肢として常に念頭に置かざるを得ないような思想となりつつあったのであります。

しかしこのアジア主義について日本がますます自信を持つようになると同時に、アジア主義の舞台と見なされていたまさにその東アジアまたは全アジアにおいて、この新しいアジア主義は日本の大国意識の表れとして受け取られ、それに対する反発が急速に強まっていったのであります。日本の発信したアジア主義は、結局その矛盾を取り除くことはできまふでした。そのあとアジア主義は1930年代に入ると侵略・植民地支配の思想に変貌を遂げ、アジアの連帯の思想として不可能になってしまいました。

どうもご清聴ありがとうございます。

【司会】 どうもサーラ先生、ありがとうございます。ただいまのお話はだいたい皆さんお分かりになられたと思ひますし、私もこれを専門にしているわけではありまふのでうまくまとめることができまふませんが、要するに1880年代ぐらい、初期のアジア主義と自ら名乗ったわけではないけれども、いろいろな言葉で語られるアジア主義は、まだバラバラであり、しかも重要なポイントはその体制側と言ひますか政府側と言ひますか権力者側と言ひますか、の主導になっていない野党的な性格を持っていた、というご指摘があったと思ひます。その中に右も左もあるが、そういう位置づけで見られるとおっしゃってられます。しかしその後日露戦争と、とくに第一次世界大戦と日本がいわゆる大国になっていくに連れて、それから他方ヨーロッパあるいはアメリカで黄禍論と言ひますか、黄色人種恐るべしという主張がなされる中で、大アジア主義と言われるものが形成されてくる。その論調はいろいろあるんだけれども、中でも非常に重要な位置を占めるのがこの小寺謙吉氏の『大亜細亜主義論』という本である。これは私も全部を読んだわけではありまふませんが、体系化された考え方を提示してあります。この人は政治家・国会議員ですが、その他教育官僚である沢柳政太郎という人達の主張があつて、一連のそういうブームを巻き起こす。さらにその中でも沢柳などは英語でその内容を紹介し、正当性を主張するようになっていく。そういう大きな流れがある。日本の大国への成長に伴ってそういう自信が主張されるようになるというお話だったと思ひます。

非常に簡潔にお話しいただきましてありがとうございます。せっかく先生がおいでになってられますのでこれを機会にいろいろご質問をさせていただきたいと思ひますが、ここで10分ぐらい休憩を入れさせていただきたいと思ひます。

【司会】 東京からせっかくおいでになりました

し、先生と直接お話しできる機会もそうしょっちゅうあるわけではございませんので、この機会にご質問なりご意見を発表していただきたいと思えます。つきましてはお名前と所属をおっしゃっていただきたいと思えます。と申しますのはあとで講演されたものを活字化します時にいつも我々は困ってるわけです。皆さん張り切って、お名前をおっしゃらずにバーンとご質問を出されるわけですけれども、あとでその人が誰だったかが分からなくて、あっちこっちに電話をかけまわしてやっと確認するような按配でありますので、まずぜひお名前とご所属はお忘れなくお願いいたします。ではいかがでしょうか。何かご質問はございませんか。

【田崎】 戦後の研究ではアジア主義というのは特に日本の場合には伝えにくくて不安定で、竹内さんが出てきてから1つ筋道ができたけど、他の人もそれに倣うというわけにはなかなかいかない。1つにはたとえば平野義太郎という人は戦前の代表的左翼の人ですけれども、戦争中は大いにアジア主義の旗を振った人ですね。それでまた戦後は民主主義になって、そこら辺りもちょっと問題なんですけど、日本人の多くは大東亜共栄圏とか八紘一宇とかいうことでアジア主義のあとのほうの流れを戦時中受けてたもんですから、それを論ずるとなると自分のことに関わるということになかなかできないというところがある。今ではそういう例はあると思うんですが、60年経ってある程度できるということは、果たしてそれが正当な評価になっているのかどうかは問題なんですけれども、外からご覧になって、日本のそういう研究の傾向があるんですね。それはどういうふうにお感じになっておられますか。またそれと類似のことはドイツやイギリスにはないのか。たとえばゲオポリティックをどう評価するかとか、そういう点などを総体的にと言いますかどんなふうにお感じになっておられますか、お教えいただきたいと思えます。

【司会】 田崎先生、念のため自己紹介をお願いします。

【田崎】 失礼しました。私は文学部にいて定年退職しました田崎と申します。よろしく願いいたします。

【サーラ】 どうもありがとうございます。研究自体について今日はあまり話していませんでしたが、確におっしゃる通りアジア主義というものの自体が、戦後になってまず1930年代の戦争の正当化の思想、大東亜共栄圏の思想としての影が強く、かなり長い間タブーであったのであまりそういう研究がなくて、竹内さんが資料集を出して論文を1本入れたぐらいで、そのあともしばらく出ないんですよ。ただここ10年ぐらいはかなり一変して、日本ではアジア主義に関してあらゆる方面から関心が出てきました。それもまた面白い現象だと私は思います。必ずしも戦争の正当化にアジア主義を使うという論調のみならず、やはりそれは竹内にもつながっていますけれども、いわゆる近代というものをどういうふうにかという文脈で、最近アジア主義に関する研究がかなり行なわれてきています。

私の研究はむしろ外交史をとりあげるもので、まあ少し思想史というものも入っていますけれども、「近代」というものについては私はあまり関心がありません。それはなぜかと言うと、アジア主義と近代とか近代の超克とかそういうことを考えると、どうしても1930年代の終わり頃か、主に1940年代の前半にアジア主義を限定させてしまうことになるので、そのようなアジア主義の歴史は非常に取り扱いにくく、私的には今まで触れたことがありません。思想としてはそれよりずっと早いものであって、外交面においても思想面においても明治初期まで遡る発想なので、近代の超克という文脈のみで考えるのは間違いだと思います。私はむしろその概念史、概念の形成はどうなったのかということについて考えています。

最近の日本の研究でも今でも1930年代のアジ



ア主義、大東亜共栄圏との関係といったものが多いんですが、たとえばもう引退されましたが九州大学の黒木彬文先生や狭間直樹先生の研究など、必ずしも結果には賛成しませんけれども初期アジア主義についてもさまざまな研究が出て、今は非常にさまざまな方面、さまざまな視点から注目を浴びているものだと思います。海外の研究者（私もそうですが）もまたそれに貢献したり協力したり、いろいろ研究しているわけです。日本でどういう研究がされているかは多くの方がご存じだと思いますが、今日の配付資料の4頁には最近英語で出たいくつかのアジア主義についての文献を載せています。かなり海外でも日本のアジア主義に関する関心が高まってきたわけでありまして。時代が変わって少し取り扱いやすいテーマになってきました。必ずしも戦争のせいということに偏るものは最早ないと思います。

【田崎】 ドイツでそういうドイツ植民地主義の正当化やアジア主義との類似点、そういうのは、まあイギリスでもけっこうですが、いかがですか。

【サーラ】 それも結局現在の状況から歴史を見るということなので、多少そういう傾向はドイツの歴史にもあります。ナチスの思想を見直そうという動きはドイツには無いんですけれども、今日私が話した小寺謙吉は1910年代のヨーロッパの、たとえば汎ゲルマン運動とか汎ヨーロッパ運動もかなり最初からありましたので、そういうものを做って積極的に評価しようという動きがあります。今はヨーロッパの統合がかなり進化してきましたが、その基礎になるアイデンティティーは未だになかなか成り立たないんです。その結果として、歴史を調べてそういうヨーロッパ的なアイデンティティーを探す研究が、少しずつ最近は出てきています。一部の歴史学者は古代・中世まで遡り、たとえばカール大帝というところについて論じたりすることもあるとあって、それはちょっと分かり難いものですが、たとえば20世紀の汎ヨーロッパ運動についてもうちちょっと積極的に評価し

ましようというような研究は最近あります。しかし、先生がおっしゃったゲオポリティック（地政学）が積極的に取り上げられることは未だにあまりないんです。これはあくまでも直接ナチスの侵略につながってきたので、私の知ってる限りではありませんが、汎ヨーロッパ運動はともかく、汎ゲルマン運動はある意味で国家の絶対性を疑う思想と取れるのではないかと、というような研究があります。

【田崎】 どうもありがとうございました。

【司会】 はいどうぞ。

【渡辺】 愛知大学創設期の学生OBの渡辺でございます。ヨーロッパの黄禍論、それとアジアで起こります大アジア主義との間、ベルサイユ条約の直後に、アメリカ合衆国ウィルソンの唱えた民族自決の運動が割って入ります。そのあげく日本が第一次欧州大戦の「火事場泥棒」として大陸に対する権益に固執し、初めは圧迫された漢民族がツングース（満州族）の支配から脱却するための支援をするというような格好で発生しました大アジア主義が、大きく変わっということで、民族自決運動は現在まで大変な禍根を残したと思いますが、この三つ巴の動きを先生はどのように見られますか、お教え願いたいと思います。

【サーラ】 ありがとうございます。ちょうど私が取り扱った時期の大きな出来事というのは、1917年のウィルソンの14か条の平和原則とパリ講和会議におけるいわゆる民族自決権という理想ですが、ウィルソンが言い出したのはヨーロッパで主にハプスブルグ帝国を解体させるための発想でありまして、これはもちろん最初から植民地の自決権につながるということは前提にしていなくて、アジアに適用するというような思想ではありませんでした。ただ確におっしゃる通り非常に影響はありました。有名なのは朝鮮半島での日本の植民地支配に対する三・一運動とか、中国の五・四運動とか、ある程度民族自決権という理想から勇

気ももらって、それを実行しようという動きだったと思われま

日本もそれに乗って民族自決権を積極的に評価した面もありますが、今日私がお話したように、アジアの結集そしてアジアの植民地からの解放を唱えながら、自分の植民地を手放さないというのが大きな矛盾点でした。当時必ずしも植民地を手放してはいけないという声ばかりではなく、石橋湛山のように植民地放棄論を唱えた人もいて、完全に不可能な選択ではなかったということはそういう論調から分りますが、日本はアジア主義を唱えるようになりながら植民地支配を続けて、結局植民地支配のためにアジア主義を利用したことが、アジア主義の失敗につながっていくのではないかと思います。

【司会】 はい。続きましてもう2～3人ご質問願いたいと思います。どうぞ。

【張】 国際コミュニケーション研究科2年生、張梅と申します。グッドアフタヌーン。(以下英語で質問) 3点お聞きします。1つ目は先生がなぜアジア主義に関心を持たれたかということ。2つ目は沢柳政太郎が唱えた「文化的汎アジア主義」という言葉はどのような表現上の意義があったのかということ。3つ目は大変シンプルな質問ですが、「東亜同文会」は英語ではどう呼んでいるのですか。

【サーラ】 3つ目の質問は東亜同文会を英語で何と言うのかということですね。公式的な英語名称は無かったと思いますが、だいたい研究では「East Asian Common Culture Assosiation」を使っています。たぶん2つに分かれています。「コモン・カルチャー」または「コモン・レターズ」。「文」は「文化」または「文字」という解釈なんですけれども、両方あります。どっちかと言うと「コモン・カルチャー・アソシエーション」という訳のほうが一般的だと思います。

1番目の質問のなぜアジア主義に関心を持った

かということですが、私は歴史家のつもりですが、なぜ常に歴史を勉強するかと言うと、現在の世界を理解したいからです。なぜこういうことが今起こるのか、なぜこういうことはこうなったのかということを知りたいので。ここ10年間では東アジアの共同体とかそういうさまざまなことが提唱されていて、政治学者の論文などを読むとつい最近いきなり出てきた論調であるように思われますが、果たしてそうだったのかと、思っているいろいろな読んでみると、ヨーロッパに汎ヨーロッパ主義があったと同じようにアジア主義というものもあったということを知り、それについて少し詳しく勉強しようと思いました。しかし英語ではほとんどこれについての研究がなく、日本でもさっきの質問にあったように取り扱いにくいところがあるので非常に関心を持ちました。

2つ目は沢柳の使った「文化的汎アジア主義」という言葉ですか。この論文に具体的に何が書いてあったかはよく覚えていませんが、彼はもうこの時から教育者で、アジア主義についていくつかの論文を書いています。元東北大学の学長や京都大学の学長だったか、そういう経歴を経て第一次世界大戦の時に自由に評論家として活動しています。やっぱり教育者としての背景があるので、政治的とか外交的なアジア主義ではなく文化に基づいたものであるべきだというのが彼の考えです。先ほどいくつかの例を出したように、宗教(彼にとっては仏教)とか東アジアに共通している文化に基づいて東アジアを結合しなければいけないということを論じているので、外交家・法律家(国際法)の小寺とは少し違って、文化を強調するところがあります。

【張】 ありがとうございます。

【司会】 その他いかがでしょうか。東亜同文書院ご卒業の方もお見えになっているようですが。

【田中】 私はこの大学のOBで田中幹雄と申します。アジア主義を考える時に、なぜ満州国が

できたかと言うと人口問題が大きな要因で、日本は島国ですから人口が増えちゃった時に行き詰まる。それで人口問題を解決するために少年義勇軍みたいなもので農家の次男・三男が大勢満州へ行っています。それと戦後日本人はブラジルに移民して、今150万人の日系人がいると言われてます。日本が経済成長した時に今度は逆輸入で二世・三世が日本に戻っていますが。アジア主義にはそういう人口問題を解決するための一面があったと思いますけれども、先生はどういうふうにお考えでしょうか。お願いします。

【サーラ】 ありがとうございます。確かに人口問題は全ての汎○○運動で非常に大事な側面であると思われま。ここはドイツと日本の論調が似ていて、それが非常に重要視される時と、それほどでもない時がありましたが、ドイツでは汎ゲルマン運動が勃興する19世紀末ぐらいですとそういう論調がよく聞こえます。第一次世界大戦に負けてからはしばらく聞こえないんですけれども、ナチス支配下ではやっぱり東ヨーロッパにおけるLebensraum（生活圏）を確保しなければいけないという論調になります。それは日本でもこういう波みみたいな動きで出てきます。明治時代には移民がハワイに行ったりカリフォルニアに行ったり。そして1920～30年代はやっぱりアジア主義というものが政府の外交政策の一部になりますが、そこで日本の移民がなぜアメリカに行かなければいけないのか、同盟を組まなければいけないアジアに行けばいいんじゃないのか、という論調もよく読むことができます。文化的にも近いところ、そしてもちろん人口密度が低いところに移民を送らなければいけない。それはアジア主義の論調の中で、特に満州国の設立の関係で非常によく出てくる問題でありまして、汎ゲルマン主義の運動などとも共通しているところがあります。

【司会】 その他いかがでしょうか。はい。

【武上】 神戸の孫文記念館で研究員をしております

す武上と申します。今日はありがとうございます。先生のご講演のタイトルが「アジア主義」ということになっているんですけども、本日のチラシにあります小寺の著書の扉頁を見ますと、「大亜細亜主義論」となっているんですね。先生の挙げてくださった文献の一覧でも「汎アジア主義」とか「アジア主義」とかいろいろ言葉が出てるんですけども、「大亜細亜主義論」となっているのは小寺が最初で、あと『亜細亜時論』の2つの社説と、堀内文次郎のものとか、まあそんなに多くはないんですね。私自身は小寺が「アジア主義」だけではなく「大アジア主義」を初めて使ったのかということに非常に興味があります。と言うのはアジア主義そのものは先生のご講演にもありましたように汎スラブ主義、汎ゲルマン主義の流れを汲んでそんなに特殊なものではないと思うんです。それが良かったか悪かったかという問題はまた別ですが。けれども大アジア主義と言った時には特殊日本的と言いますかそういう要素が非常に強まると思うんですね。たとえば孫文が亡くなる直前の1924年に行なった「大アジア主義問題について」という講演は、実は孫文はそのタイトルではやりたくなかった。けれども神戸の主催者からの強い要望で「大アジア主義問題について」というタイトルになって、最後に有名な「王道か霸道か」という悲痛な叫びにも似た言葉になってしまっわけなんですから。アジア主義であれば初期アジア主義に限らず、やはり孫文も含めてそういうアジアの連帯主義というものに望みを託した人達は中国にも、それ以外のベトナムにも朝鮮にもあったはずなんですね。ですから私はその大アジア主義というものの誕生と言いますか、そういう系譜というのが小寺にあるのだとすれば、彼は後に神戸市長も務めていますし、神戸と孫文の浅からぬ縁の1つということにもなって、非常に興味深く感じましたので、先生にご質問したんですが。

【サーラ】 ありがとうございます。そこは不思議

議な縁なんですけど戦後初めての神戸市長は小寺謙吉です。1930年ぐらいに彼は政界を引退して、あとの詳伝には軍国主義の流れに反対して引退したと書いてありますが、それは本当かどうか分かりません。衆議院の選挙で落選して、というのがあります、ともかく30年に引退して45年までは政治的な活動を行なっておらず、戦後初めて神戸市長を務めました。そこは確かに孫文との縁がありますが、おそらく偶然だと思います。彼は神戸の近く、兵庫県の三田という地方の出身なので、そういう関係でたぶん神戸の市長になったと思います。

私は今日のタイトルで「大」も「汎」も「全」も何も付けずに「亜細亜主義」と書きましたが、これは片仮名で書いてもいいかも知れませんが言葉によって微妙にニュアンスが違ってくるのは確かです。今日の資料で配った新聞記事で一番最初に出てくる日本語の「アジア主義」には意外にも「汎」が付いています。「汎アジア主義」。この新聞はロンドンタイムズに載ったマハンというアメリカの有名な海軍評論家（海軍出身）の記事を取り上げてそれを批判しているんですが、マハンの記事の中では「Pan-Asianism」という言葉を使っていて、その訳として日本の新聞が「汎アジア主義」を使っています。

さっきも言いましたように日清戦争の時ぐらいから欧米では「Pan-Asianism」とか「Pan-Asianismus」という言葉が使われてるんですね。それはもちろん「黄禍論」という文脈で、そういう危険性がある、これは恐ろしいというふうに書いてありますが、これについて日本で書いている場合は、この新聞のようにやはり「汎」を付けて「Pan-Asianism」が「汎アジア主義」と訳されています。だからと言ってこれはあまり危険性のない思想であるとは言いきれない。それは立場によります。ただ「汎アジア主義」という言葉はたぶんドイツ語や英語の「Pan-Asianism」の訳語として出てきます。

小寺は私が思うにはおそらく1930年代の大アジア主義とか大東亜共栄圏のようなニュアンスではまだ使っていないと思います。「汎」という言葉はおそらく皆さんそうでしょうけれども日本ではあまり馴染みがないと思います。たまたま「汎」と「Pan」という音も近いし、意味も「広い」という意味で非常に合うんですが、あまり普段使わない漢字なので「大」に変えたんじゃないかと思っています。意味が「汎アジア主義」と違うということは小寺の場合は無いと思います。彼は本の中で説明はしていませんけれども、ヨーロッパに汎ゲルマン主義があって、汎スラブ主義があって、私達は大アジア主義を樹立しなければいけないと書いています。同じ流れで「大」を使っているので「広い」という意味での「大」だと私は理解しています。ただそれは30年代には大亜細亜協会とか大東亜共栄圏とかいうものになってしまうので、今の観点で彼の本を見てみるとちょっと違う本だと思いがちですが、まだ1930年代のような侵略的な思想ではありませんでした。

第一次世界大戦の時にはまだ概念としてあまり定着していなかったことが、この言葉づかいにも出てきます。「汎アジア主義」という言葉があったり、「大アジア主義」という言葉があったり、「アジア主義」だけという人もいたり。そして大川周明は同じ1917年に「道」という自分で発行した雑誌の中で「全アジア主義」という言葉を使っていますし、「全アジア協会」というものも作っています。ですからこの時期はまだ言葉によってその内容を区別するのが難しいと思います。

【司会】 はい。今日は中身のあるご質問にじっくりお答え願って、非常に良い講演会になっていると思います。ご質問をもう1人ぐらいお受けしたいと思いますが、いかがでしょうか。ごさいせんか。こちらからあまり強要するのも何でございまして、それでは非常に効率的に講演なさり、ご質問もいろいろ受けまして、無事この講演会を



終了することができますことを大変喜んでおります。5分前でございますけれども皆さんお疲れでございましょうから早めに切り上げさせていただ

きたいと思います。もう1度サーラ先生に感謝の拍手を贈らせていただきます。サーラ先生ありがとうございました。